埼玉県退職校長会会報

題字・清水章夫
第156号
平成28年1月

継承と創造

埼玉県退職校長会　副会長　卯木　郁朗

本年度は、ノーベル生理学・医学賞を大村智・北里大学特別栄誉教授の受賞に続いて、ノーベル物理学賞を本県出身の梶田隆章・東大宇宙線研究所長が受賞され、世界に誇れる快挙に日本中が沸きました。

梶田隆章氏は、本県の東松山市の小中学校、川越高校、埼玉大学で学び、研究を積み重ねた成果は、子供や学生・研究者・県民に夢を与えました。

今、少子・高齢化社会が進展する中で、生きがいのある人生を送ることが求められております。

埼玉県退職校長会では、重点目標に、会員の福利厚生の充実と学校支援の充実を掲げております。

それらについて県本部理事会や支部長会、「彩の国教育の日」協賛現職・退職校長教育推進協議会等での情報交換で多くを学びました。

支部活動の充実が、県退職校長会の充実・発展の土台になるという視点から、「継承と創造」を指針に支部の活性化に努めております。

埼葛支部では、昨年度から「理事研修」を改めた「会員研修」に加えて、市町が担当する「市町研修」を導入し、26年度は、春日部市担当で「首都圏外郭放水路の見学」を、本年度は、久喜市担当で「本多静六林学博士」に学ぶ講話や記念館の見学を実施し、多くの参加者を得ました。

また、本年度から「彩の国教育の日」協賛現職・退職校長教育推進協議会に、従来の開催地のPTA連絡協議会長の参加から12市町会長の参加へとご理解、ご協力を頂きました。

更に、会員の相互理解と親睦を深めるために、3つの同好会が発足し、活動を始めます。こうした活動の拡充が、県退職校長会の発展の一助になることを願っています。

そして、27年度勇退される校長先生方に、喜んで入会していただけるよう「継承と創造」をモットーに魅力ある退職校長会を目指して、努力して参る所存であります。

結びに、県下の会員の皆様のご健勝を祈念いたしますとともに、先輩の先生方、会員の皆様のご指導・ご鞭撻をお願いし、巻頭の言葉とさせて頂きます。

学びの質や深まりを求める
アクティブ・ラーニング

埼玉県退職校長会　副会長　栗田　憲昭

中教審は、新しい時代に必要となる人材の資質・能力を育むためには、学びの質や深まりを重視する「アクティブ・ラーニング」の学習方法が重要であると提言している。

それは、学習者が主体的に考え、仲間と共同して課題解決法を発見し、感動を味わう学習方法である。

その実践例として、小学校高学年の「馬とびくぐり三回挑戦」を紹介したい。

まず、二人一組になり、一人が「馬」、他の一人が「馬とびをしてから、馬の両脚の間をくぐる」運動で、三〇秒で何回できるか挑戦させる。

(1)一回目結果は、五回以上が三分の二、一〇回以上は三組であった。そこで、「君達なら一〇回以上はできるはずだ。作戦タイムを三〇秒あげる。馬も工夫すること」と指示。

(2)二回目は、一〇回以上が三分の二になり、最高は一三回であった。私は最高の成績をあげた組を「頭を使うとこんなに記録が伸びる」とほめた。そして、この組の動きを全員に見学させた。

すると、皆が「もう一度挑戦させてください」と言う。そこで、今度は一分間の作戦タイムをとらせた。どの組も自己課題の改善に向けて、知覚、思考、練習を繰り返し懸命に挑んでいた。まさに、アクティブ・ラーニングである。

(3)三回目は、大部分が一〇回以上、最高は一五回であった。どの組も記録が伸びたことに感動して、手を握り合って喜んでいた。

このような質の高い学習を組み立てるには、押しつけ、暗記、条件反射の繰り返しではなく、学習者の創造活動をどう位置づけるか、能力や、やる気をどう引きだすかが肝要である。

この授業構成上の要点は、次の四点である。

(1)教えこむより考えさせる
意図・喜び・感動が湧いてくるような学習者が一番やりたい内容と方法を工夫する。

(2)自己改善能力を育てる
課題解決へ向けて、思考修正・練習・定着へと深める。

(3)自己開発能力も育てる
定着で止めず、発展課題をみつけて、思考修正練習する。

(4)豊かな対人関係を育てる
おかげさまでありがとうの